

イベント



三木工場・ビオトープで実施したワークショップの様子。円内は講師をお願いした水ジャーナリストの橋本淳司さん

2023年6月、ミツカングループ社員向けの企画として「ミツカンの水づくり～三木工場・ビオトープ～」を実施しました。昨年に引き続き、水ジャーナリストの橋本淳司さんにご協力いただき、オリエンテーション(6月6日)とビオトープを併設する三木工場でのワークショップ(6月13日)を行ないました。

オリエンテーションでは、現三木工場長が「三木工場の水使用量、水循環システムの仕組み」を、三木工場設立に携わったミツカンのOBが「当時の背景やコンセプト」を説明。そして、橋本さんからは「現代社会における生産拠点(工場)での水事情」をお話いただきました。

ワークショップでは、オリエンテーションでの内容を踏まえ、

実際に三木工場の利排水設備やビオトープを見学。また、三木工場の排水を使用している地域関係者の方々から水の重要性や三木工場の取り組みへの思いなどを伺い、さまざまな部門の社員がチームごとに討議し、明日からできる「未来アクション紙芝居」の作成・発表を行ないました。

自社の水への取り組み、地域との関係性などを知り、これから自分たちにできることを考える貴重な機会となりました。

今後も、社員が自社の事業活動における「水」の重要性を認識し、「水」に関する興味関心を深め、視野を広げる企画を継続していくことで、「人と社会と地球の健康」の実現に貢献してまいります。

会議



ミツカン東京ヘッドオフィスで開催したアドバイザー会議

2023年9月、当センターのアドバイザーである沖大幹さん、陣内秀信さん、鳥越皓之さんとセンタースタッフが一堂に会してアドバイザー会議を実施しました。

本年度前半の活動内容、そして社外のステークホルダーに聞き取りを行なった活動の評価を報告。さらに2024年度の活動計画案をお伝えし、意見交換を行ないました。

アドバイザーの方々から客観的かつ長期的な視点からいただいた数々のご意見をもとに、2024年度以降もセンター活動を推進してまいります。

調査

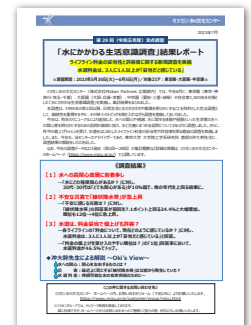
第29回「水にかかわる生活意識調査」結果レポート公開

1995年に調査を開始した「水にかかわる生活意識調査」は、日常生活と水のかかわりや意識を明らかにすることを目的とした定点調査です。29回目となる2023年度は、20代～60代の1500名を対象に実施し、7月にHPで結果レポートを公開しました。

昨今の値上げラッシュのなか、水道や電気などのライフライン料金について生活者はどのように感じているのでしょうか。

今回は、このような状況下だからこそ新たな試みとして、これらの料金の妥当性や許容度を探る趣旨の設問を追加しました。また、結果レポートのなかから、不安な災害で「線状降水帯」が急上昇したことを取り上げ、リリースを発信。これをきっかけに「社会変化と水インフラ研究会」にお声がけいただき、勉強会に参加しました。

来年度は、第30回という節目を迎えますので、アドバイザー会議や勉強会での学びを活かし、より有益な調査となるよう検討を重ねてまいります。



琵琶湖関連の書籍をプレゼント!



- ①『忍びの滋賀—いつも京都の日陰で』(姫野カオルコさんの著書)
- ②『琵琶湖—水辺の文化的景観』(金田章裕さんの著書)
- ③『おいしい琵琶湖八珍—文化としての湖魚食』(滋賀県ミュージアム活性化推進委員会編)
- ④『RICE IS COMEDY—人口4000人のまちで仕掛ける「地域の生存戦略」』(ONESLASHの著書)

今号の制作にご協力いただいた皆さまの書籍のなかから、琵琶湖や滋賀県を深く知ることができる書籍を抽選で4名の読者に差し上げます。右の「75号アンケート」にWebから回答のうえご応募ください。なお、応募期限は2023年11月30日(木)とさせていただきます。

皆さまからの感想、
情報をお待ちしています!

『水の文化』75号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://forms.office.com/r/pX5hTjduhX>

アンケート用紙をお持ちの方は
下記へご返信ください。

FAX: 03 (6784) 3056

編集後記

琵琶湖を実際に訪れ取材を重ねるにつれて、その器の大きさに魅了された。日本一の面積が、生まれ育った知多半島がすっぽり収まり、東京23区よりも広いこともさることながら、関わる全ての人を包み込み、自分勝手な振る舞いにも理解を示し、周りからの絶大な信頼を得ている姿に、憧れに似た大人の余裕を感じたのだと思う。(五)

長い歴史の中で、環境も社会も人の価値観も変化する中、「何をし、何をしない方が良かったのか」を記録することが、後世の大きな財産になると伺い、「水と人」との関係を追いつけてきた琵琶湖研究の深奥を感じました。そして同じく奥深い「ふなずし」の世界。食べ比べ目的で、滋賀県を訪問したいと思います。(松)

滋賀県というと彦根城を思い出します。桜の季節に訪れた彦根城は薄曇りの中、満開の桜と天守が素晴らしい風景をつくり出していました。堀周辺も散歩したのですが、あの堀の水もすべて琵琶湖から引いているのかと今さらながらに気づきました。彦根城の堀は三重だったそうなので、次は外堀の痕跡探しに行きたいです。(飯)

「東京は山がないから、どこにいるかわからん」。山の多い土地で育った友人が言っていた。琵琶湖のそばで生きる人々も、湖水と山々がかたちづくる風景で自分の立ち位置をつかんでいるのだろう。自分にとっての座標の「0」についての話は、その人の言葉が聞けることが多いように思う。そんな取材は楽しい。(秋)

最終回を迎えた「水の文化書誌」。古賀さんから撮影用に書籍をお送りいただくやり取りを、水の文化26号から続けてきました。その荷物の中には必ず、棒ラーメン、お茶、お菓子など福岡にちなんだお土産が。同郷の家族が常に楽しみにしていました。今後は書籍のやり取りはありませんが、いつもの羊羹はこれからもお送りしたいと思います。(力)

大津で地元の人しかいない食堂に入って昼定食を頼んだ。唐揚げを頼張りつつ学習船「うみのこ」について聞くと「乗りました!」と若い店員さんが声を弾ませ、常連さんたちは「俺も乗った」「二年違いで乗れなかった」と言い、厨房のおかみさんは「乗った乗らんで年齢がわかるから困るんよ」と笑う。なんだか幸せな昼下がりがだった。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌
水の文化 第75号

ホームページアドレス

<https://www.mizkan.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2023年(令和5年)10月 初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越皓之 大手前大学教授

制作

浦本五郎

松本裕佳

小林夕夏

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

秋山健一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.18-21, pp.28-29)

上原 純 (pp.16-17, pp.22-23)

佐々木 聖 (pp.6-7, pp.10-11, pp.24-25,

pp.42-43)

前川太一郎 (pp.8-9, pp.12-15)

若井 憲 (pp.26-27)

撮影

川本聖哉

藤牧徹也

渡邊まり子

印刷

中塾総合印刷株式会社